翻身論序説
——日本ファシズム期におけるあるジャーナリストの生き方の事例分析を中心に——

渡辺　牧

本研究は，翻身の社会学的解釈枠組の探究をめざしている。この問題解明のために，主観的，客観的現実論と役割論，準拠集団論の検討を手掛かりとして，日本ファシズム期におけるあるジャーナリストの生活史のケース・スタディを行う。

I　序

本研究は，翻身（Alternation）[1]の社会学的解釈枠組の探究と，その生活史研究[2]への応用を究極目標としている。はじめに，広義での翻身を，内面から切り離れた物象化，制度的レベルでの地位，役割などの変化とは異なる，個人の内面世界の変容に根ざした生き方の変更と仮定的に定義しておきたい。筆者は，翻身の諸類型として，(1)宗教上の回心を典型例とする超現実的啓示による翻身，(2)転向を典型例とする個人に外在する権力，勢力によって強いられた翻身，(3)内発的に自他の被抑圧情況からの解放のために立ち上がる翻身，(4)ー(2)と(3)の中間タイプの翻身を仮説的に考えている。翻身は，人々が自らの生活史を再解釈する過程で，それまでの生活で自明視していたーおぼろげな疑念は抱いていても大枠では自明視している場合から，全く疑念を抱いていない場合まで「自明視」には個人の生活史によって差異があるがー自己の生き方，世界観などからの離脱，乗り換え，あるいは過去のそれらの訂正，否定を迫られることから発生する。翻身は，嗜好や趣味の変化，地位変容に伴う勤労態度の変化といった，個人の一生に対し局域的な影響をもたらす態度変容とは異なり，個人の生涯を全域的に左右する生き方の根本的変更として捉えられよう。人生の転換点（turning point）とも言われる翻身の遂行過程では，個人の生き方の根底を支えるプリンシプルと人生の目標，自己と他者との関係性，人間観，世界観をめぐる振幅の大きな価値転換がみられ，翻身者の主観では過去の生活史との断絶が経験される。しかし，その断絶は絶対的なものというより相対的尺度においてしか社会科学的には捉えられぬ位相にあるのではないか。過去の生活史の局域的否認により新しい生き方を模索する個人から，過去の全否定から人生のやり直しを企図する人まで，翻身の具体的形態には差異がみられる。翻身者の意識についてみると，生き方の変更を遂げてゆく過程について，彼が無意識的，半意識的，意識的のいずれの意識段階であったのかが問題点となる（Berger〔1963→1979：81-98〕）。

このように翻身形態には多様な差異がみられ，宗教的回心やいわゆる転向にみられるように，その内面的変容の軌跡は極めて複雑である。このため，その社会学的解釈のためには多元的な解釈枠組の検討と事例研究の積み重ねが必要だと思われる。[3]ここでは，その序説として，現代中国における「被圧迫者が圧迫をとり除き，人間としての生活を営むようになる。解放されて立ち上がる」（香坂・太田〔1965：155〕）という翻身の定義にもみられる，翻身を行う主体

が翻身過程について意識的で，内発的翻身をとげてゆく場合の社会学的解釈の検討に考察内容を限定したい。筆者の翻身への問題関心は，人間の生き方があらかじめ約束されたかのような過去からの軌道の延長線上で営まれるとは限らず，諸種の契機によって可変的でもありうることに端を発している。筆者はこれまで翻身の社会学的解釈を行うための予備的作業として，生活史の聞きとり，文献研究と並行して，現象学的社会学，シンボリック相互作用論，準拠集団論研究などを通じて，解釈枠組への手掛かりを模索してきたが，本稿はその中間報告である。以下では，はじめに，日本ファシズムの形成，確立とその解体期にジャーナリストとしての前半生を送ったむのたけじの生活史の概要を再現し，次に，主観的，客観的現実論と役割論，準拠集団論を手掛かりに，翻身の社会学的解釈枠組の検討を行う。そのうえで，この解釈枠組を用いながら，むのの翻身の事例分析を行い，翻身論研究の仮説的問題呈示を試みる。

II 日本ファシズム期[4]におけるむのたけじの生活史

ここでは，ジャーナリストむのたけじの日本ファシズム期の生活史に焦点をおいて，ファシズムの形成，確立，解体過程の中で，ファシズムの支配的規範に対し，いかなる関係変容をとげていったかを，むのの著述に即して再現してみたい。

むのたけじは小作農民の子として1915（大正4）年，秋田県に生まれた。父は本家から4反歩の田を借りて耕作すると共に，荷車，後にはリヤカーで地域の人々のために運搬を行う便利屋をして生計をたてていた[5]（むの〔1970：66〕）。畳屋の小僧にいくはずが，寺の住職が「できる子になるだけ教育を受けさせるのが親の務め」と親に進学を勧めたのが契機になり，旧制中学に進学（むの〔1964：14-15〕）。中学では，東京外語出身の増田竹重という英語教師が，海外の友人からの英文の手紙を教材に使っていた。手紙には，しばしば，「カスミガセキーバカヤロウ」と書かれていた。満州事変（1931年）の数年前の時期で，その言葉は日本外交の無為無策に対する海外からの罵倒を意味していた（むの〔1968：186-187〕）。

中学から師範二部にいくはずが，好きな外国語の勉学へ進めたのは，父が東京外語出の担任教師に親切にされたことが契機になった。東京外国語学校に1932（昭和7）年入学，郷里の育英財団から月15円，親から10－15円の送金で「食うので手いっぱいの学生生活」（むの〔1964：14-15〕）の中で，貧富の差の社会矛盾に視野が開かれ，社会主義の本を熱心に読むようになった。「忠君愛国を美徳として疑うことを知らなかった少年が，たくさんの疑問を抱いた青年にかわりつつあった」（むの〔1964：16〕）。弁論部員として，全国大学高専弁論大会で臨検の中止命令をきかずに壇上から引きずりおろされたりする中で，社会変革への思いを強めた。外語での専攻のスペイン語の外国人講師ムニョス氏は「フランコのいる限り母国には帰らない」とファシズムへの抵抗を学生に語りかけた[6]。むのは学生運動の中で，水平社の人々[7]と接触もしたが，「運動の本質はつかめず，安っぽい同情にとどまった」（むの〔1968：180〕）と戦後，回想している。

卒業直前の1936（昭和11）年春は，ヒトラーの前進，中国共産党の抗日救国宣言，軍部の内部抗争によるテロ，2.26事件と，不穏，不景気な時代情況だった。むのは，就職への明確な意思はなく，「貧困が生まれる社会のしくみを改革したい」と思いながらも，自分たちで組

織を広げる力はなかった。「とにかく束縛されず自由でありたい」(むの〔1964：18〕)と思い，同年，報知新聞社に入社。入社後は，「21歳の若さはこの職業のもつ活気に共鳴，日がたつにつれて仕事に興奮」(むの〔1964：19〕)していった。1938年，栃木通信局で，放火被疑事件など2件の捜査誤認を報道，無罪判決を得る一因となった。警察署長から呼び出され「警察にうらみがあるのか」と言われたが，むのは「罪のない国民に警察は何のうらみがあるのか」と応酬した。

しかし，1940年9月の日独伊軍事同盟調印，同年10月の大政翼賛会誕生とファシズム体制が確立する中，本社社会部遊軍の記者となったむのも，次第にファシズムの影響を記者活動に受けていった。11月には皇紀2600年式典が開かれ，街々には「祝ひ終った，さあ働かう！ー大政翼賛会」のポスターが掲出された。その有様を記事に書いたあと，むのは報知に退社届けを出した。

報知から朝日新聞社会部に転じたむのは，太平洋戦争開戦までの約1年間を「自分がどんな仕事をしたのか茫漠としている」(むの〔1964：46〕)と回想している。1941年，外相松岡洋右は，防共枢軸の強化を策し，さらに日ソ中立条約を結んだが，6月22日，ドイツ軍は独ソ不可侵条約を破りソ連に侵入，「独ソ開戦は松岡の世界情勢認識に重大な錯誤のあったことを暴露」(むの〔1964：47〕)した。23日朝，むのは松岡と単独会見，夕刊トップに記事を執筆したが，後に彼は，このとき松岡が何を語ったか思い出せない，と回想し，「時代の流れと，おのれ自身の生存と，どこにも接点のなかったせいか」と述べている。開戦までの日々について「外界の出来事は自分とは関係なしに通過していくようだった」，「職業上の早耳で局面の切迫を知り得ても，日本が米英に真っ向から戦いをいどむと予想できる実感は少しもなかった」と述べている(むの〔1964：47〕)。12月8日の戦勝ニュースには，小が大の鼻柱をへし折った興奮とともに，大変なことになったと感じた。[8]

1942年1月，従軍特派員として台湾を経てインドネシアに駐在，43年1月に帰国。この間，検閲体制[9]のもとでも，むのはジャワ軍政の真実の一端を何とか報じようとして，バタビヤ市長に日本人を任命という重要ニュースを検閲を突破し打電。軍政部から「記事の出所を言わねば軍法会議にかけるぞ」とおどされたが，取材源は守り抜いた。[10] 8月3日付の国内にいる妻宛ての手紙で，むのは次のように書いている。「ジャワで半年くらしてはっきり思いあたるのですが，そのときは従軍という行動に緊張しながら，一方では否定しきれない懐疑を頽廃ではないかと苦しんでいました。日本は，自分の問題を自分で解決できないから，満州に兵を出し中国本土に戦場を拡大した。そこでも問題を解決できないので今また南へ戦場を拡大した，これは過失をもって過失をつぐなおうとする徒労の冒険でないか，という疑いに責められていた。いま一層確信を深めました。支那問題を解決しないで，日本にアジアを語る資格はない。日本の敵は米英でも蔣介石でもなく，日本自身です」(むの〔1964：64〕)。

1943年に帰国，生活物資の配給制下，「こうも食うものがなかったか！」と痛感した。再び遊軍記者に戻ったが，ファシズムの惰性の流れの外に立てず，「靖国の遺児の社頭対面」，「女性総進軍」の連載記事を書き，山本五十六の国葬記にはおおげさに悲壮の漢字をならべた。戦争の前途に疑問は深めていたが，その結末を実感として受けとめられなかった。

むのの戦時下の救いは読書で，月給の半分を書籍の購入費にあてた。一番の関心の中国問題については尾崎秀実，橘樸などを読み，内面的にもっとも影響を受けたのは魯迅だった。[11]

1944年3月から45年1月まで，むのは3本社（東京，大阪，九州）に寄せられた投書の全部に目を通し概況報告を行う仕事を担当した。月平均1,400通，読者700人につき1通の割合の投書が寄せられた。玉砕賛美批判，貧乏人の犠牲下で一億一心にはなれない，などの厳しい戦争批判の投書を読み，「心臓が板挟みにされる息苦しさ」（むの〔1973：147〕）をおぼえた。投書内容が真実であるほど，新聞社はそれを捨てねばならなかった。1944年9月，静岡，山梨両県下の学童疎開先を取材，学童の淋しさ，ひもじさを記事に書いた。自社の幹部は「この時局にこんなセンチメンタルな記事をのせるのはけしからん」と怒った。9月27日，長女のゆかり（当時4歳）が疫痢で急死した。その前日に発病したが，近所の医師たちは出征する医師の壮行会のため不在。何とか隔離病舎へ入れたが，病院の人手，医薬品不足はひどかった。娘の死を契機に，むのは徹底した反戦主義者になっていったと回想している。[12]

Ⅲ　翻身の社会学的解釈枠組の検討

Ⅲ－1　主観的，客観的現実論の検討

Ⅱで再現したむのの翻身過程を分析するため，ここでは翻身の社会学的解釈枠組の検討を，主観的，客観的現実論と，役割論，準拠集団論を手掛かりとして行いたい。

翻身は，解釈の準拠枠変更により，人々が社会的世界の意味解釈に関する類型化，レリヴァンス体系を変換してゆく過程で発生する。[13]その様態は，個人の意思のレベルにとどまる段階，あるいは具体的な行為レベルに進む段階など諸種の段階が仮定できる。本稿では，むのが，生き方の変更をめぐって，意思，認識レベルから行為レベルにまで，いかにして移行してゆくのかを中心に分析を進める。

現象学的社会学的立場に立つ P. L. Berger らは，翻身の契機として，主観的現実（subjective reality）と客観的現実（objective reality）の不調和をあげている。[14]客観的現実とは，個人の出生に先立って存在し，死後も存続するであろう歴史的，客観的制度の現実である。主観的現実とは，個人の意識の中に投げ返され，いわば内面化された現実であり，それによって人は他者の世界を理解し，その世界は彼自らの世界にもなる（Berger & Luckmann〔1966→1979〕）。Berger らは，翻身は，生活史を通じてはてしがない第2次社会化[15]の過程で発生し，「翻身とは社会化のやり直し」（Berger & Luckmann〔1966→1979：264－275〕）だと述べている。翻身は，主観的現実の従来の慣例的構造の暴露と破壊，いわば主観的履歴書の断絶を伴うものであり，社会的，概念的条件の組み替え，移行により促進すると解釈できる。[16]

以上の Berger らの解釈枠組を手掛かりとしつつ，筆者はさらに，個人が，重要な他者たち（significant others）との相互作用過程を通じた準拠関係性の形成，確立，変容により，解釈の準拠枠を変更し，そのことがいかにして生きてゆくことの意味をめぐる価値転換をもたらし，翻身への引き金的役割を果たしてゆくのかを，次に，役割論，準拠集団論を手掛かりとしながら検討したい。これらは，相互作用論の視点からみるとき，役割取得，役割遂行の可変性，準拠他者を媒介とする個人のパースペクティヴ更新に対応した情況定義の変容をめぐる問題および，社会的現実が個人の内面でいかに構成され変容してゆくのかという主観的現実をめぐる問

題の解明につながっている（Shibutani〔1955〕, McCall & Simmons〔1966：6-7〕, Schmitt〔1972〕, Urry〔1973〕）。

Ⅲ－2　役割論，準拠集団論の視点の検討

筆者が翻身論の解釈枠組の一つとして準拠集団論を手掛かりとしたのは，個人の情況定義の解釈，主観的現実をめぐる準拠枠は，個人の経験に先行してできるのではなく，肉親，友人，書物など多様な準拠関係を媒介に形成され，準拠関係性の変容が翻身を促進する概念的，社会的条件になるのではないかと仮説的に考えたことに起因している。ここでは翻身分析のために，役割論，準拠集団論をめぐる視点の検討と，次に準拠関係性，役割取得に関する解釈装置の検討を行う。

個人の生活史を社会学的に対象化する際，個人がいかに諸種の社会的役割を解釈し，役割取得，役割遂行を行ったのか，あるいは，いかに役割遂行過程から離脱していったのかを考察することは，個人の社会化過程の分析に連接していよう。そうした生活史における役割取得，役割遂行の可変性とその契機を分析することは，翻身論の主題と深く関わっている。しかし，社会学の役割論には視点の差異がみられる。このため，翻身分析に有効だと思われる視点について次に考えてみたい。

機能主義の視点に立つ役割論は，役割を，社会システム内の特定の社会的地位の占取者に対して他者が抱く期待の束として捉えている（Merton〔1957〕, Parsons〔1952〕）。機能主義的視点から，準拠集団論に関する包括的な再定式化を行ったR.K.Mertonは，準拠集団論の主要な課題として，諸個人が自己を種々の集団に関係させ，自己の行動を集団の規範，価値に準拠させる過程の分析をあげている（Merton〔1957→1969：153〕）。しかし，こうした機能主義的視点では，個人が単に集団の規範，価値に一方的に準拠するだけではなく，個人がそれらを評価し，再解釈を加え，ときに否認，離脱を図り，生き方の変更を試みてゆく過程が説明困難である。

このため，翻身分析には，機能主義的視点ではなく，人間の社会的役割，準拠関係性の可変性を解明するための視点と解釈枠組が求められよう。筆者は，その手掛かりとして，ここでは，J. Dewey, W. I. Thomas, C. H. Cooley, G.H. Mead らの流れをくむシンボリック相互作用論[17]に注目したい。なぜならば，ミードらは，人間が社会的役割を機械的，受動的に取得するだけではなく，生活史の中で出会う役割を，情況の解釈，再解釈に基づき修正した形で取得してゆくことを理論化しているからである（Mead〔1934→1973〕）。人は思考と呼ばれる内的舞台を通じ，自己に語りかけ再考することができる。このため，役割取得は，その可否を自己に問い，他の役割との関係を考えて役割取得の度合，取得内容を変更することが可能である。その意味から，役割取得，役割遂行は，人間が自己の内面に耳を傾け自己と対話するという反省作用（reflexiveness）と切り離して考えることはできない（Mead〔1934〕）。

一方，機能主義の視点に立つ準拠集団論は，所属集団および所属を希望する集団と個人の準拠関係性を主要な問題としてきた。その際，考慮に入れられていたのは，主に実際に存在する集団であった。その把握には，次の問題性が指摘できよう。所属集団であっても，個人の内面に根ざした主観的現実において，その集団存在の意味が無視ないしは否認された場合，集団からの影響関係は稀薄になる。逆に，物理的意味では存在しなくとも，精神的意味で人の心にり

アリティー豊かに生き続ける他者や観念は，個人の生き方に深い影響を及ぼしうる。文学作品における登場人物，音楽，美術の深層に流れる主題，歴史上の人物など，想像上の準拠他者（imaginary reference others）は，対面的相互作用（face-to-face interaction）関係にある準拠他者と共に，個人の生き方の変容過程に重要な意味をもっているのではあるまいか（Schmitt〔1972：57-58〕）。これらの問題に対して，機能主義的準拠集団論では十分な説明を行い難いのである。[18]

他方，P. L. Bergerは，準拠集団論が個人の主観的現実の形成，変容過程の一環を解明する有効な方法であることを示唆している。人間のある集団への加入，別の集団への移行には選択的な認知的関与が伴い，自己を委ねる集団の差異によって世界観も変容する。Bergerは，準拠集団論が，役割論と知識社会学を連接させる媒介的役割を果たしうるとみて，「知識社会学が現実の社会的構築に関する広い視野を提供してくれるものとすれば，準拠集団論は，その中で宇宙を構築している仲間たちが，それぞれのモデルを叩き上げている小さな工房を見せてくれる」（Berger〔1963→1975：175-176〕）と述べている。しかし，Bergerの示唆を受け，翻身過程の具体的分析の解釈装置として準拠集団論を応用してゆくためには，意味内容の拡散，曖昧さがみられるこれまでの準拠集団概念では解釈装置として不十分である。

以上の問題性を克服し，翻身分析に有効な解釈装置を探索するため，次に①同一化対象との準拠関係性（the identification object reference relationship），②規範的準拠関係性（the normative reference relationship），③比較準拠関係性（the comparative reference relationship）の3種の準拠関係性などの解釈装置の基本的検討を行う（Schmitt〔1972〕，Urry〔1973〕）。

Ⅲ－3　解釈装置の検討

翻身過程に影響を及ぼす準拠他者と個人の関係性は，他者が一方通行的に影響をもたらす場合と，両者が相互作用の中でいわば相互準拠的に影響を及ぼし合う場合の2種が想定される。ここではまず，情緒，規範・価値，比較の3レベルに関する準拠関係性の定式化を行いたい[19]（Schmitt〔1972〕）。

①同一化対象との準拠関係性は，もっとも根源的には，準拠他者に対する情緒レベル（a sentiment level）での結びつきによる他者との同一化を意味する，と定義しておく。[20]発達論的視点からみると，子どもの第1次社会化は，親との情緒的結びつきなしには促進されない。子どもの親への同一化は，親の子に寄せる愛情なしにはありえないように，この関係性には相互準拠的な特質がみられるが，ここでは，自己が他者に一体化する局面にのみ，定義の範囲を限定する。幼年期に，とくに親との結びつきによって形成されたこの関係性は，生涯を通じて，個人の生き方に直接，間接の影響を及ぼすと仮定しておこう（Freud〔1921→1970〕，Berger & Luckmann〔1966→1977〕）。

②規範的準拠関係性は，機能主義的視点からは，これまで，個人が準拠集団，準拠他者の規範，価値に影響されるという一方通行的な捉え方が多かった。しかし，その視点からは，個人がある規範，価値を無視ないしは否認して，別のそれへと支持対象を移行する翻身の過程はみえてこない。このため，ここでは，そうした一方的関係性だけでなく，個人が，これらの規範，価値を自らの志向性のもとで再解釈し，評価を加えてゆく，双方向の関係性と定義しておく

(Urry〔1973〕)。

③比較準拠関係性は，比較のパースペクティヴおよび比較対象が自明視されたこれまでの世界に関する「因習的比較」(conventional comparison)と，自明視された世界の意味を問い直しそこからの離脱を企図する契機となる「構造的比較」(structural comparison)の2種に分節化することができる。前者は，これまでの日常生活の因習的な枠組の中で，自己を価値評価するために用いられ，後者は，日常生活の自明性の解体と新たな生き方の可能性に視野が開かれるための契機となる。「因習的比較」は，日常生活における規則的相互作用(regular interaction)の面からみると，社会的ネットワークが狭くなるほど，比較は限定され，逆にゆるめられるほど広くなってゆく。因習的比較はネットワークの外には広がらず，新旧の社会的世界の比較を可能とする構造的比較とは不連続的である(Urry〔1973〕)。

次に，役割取得とその可変性の検討を行う。相互作用論的視点から，ここでは，役割取得を，準拠他者の規範，価値の内在化を通じて他者の役割を取得することと定義しておく。比較準拠関係性の広がりと深まりによって，内在化された規範，価値が相対化され，あるいはそれらが否認され，別の規範，価値の内在化が図られる場合には，取得される役割内容は根本的に可変的となるといえよう。

Ⅳ むのたけじの生活史の分析

以上の翻身をめぐる社会学的解釈枠組の検討を手掛かりとしながら，ここではⅡで再現したむのたけじの翻身過程の分析を行う。

むのの生活史を振り返るとき，彼の生き方の根底には，貧しく抑圧されている人々へのあたたかな共感と，その裏返しとして，威圧的な警官，軍人など特権的立場にあぐらをかく人々への反感が一貫して存在していると思われる。学生時代，社会的貧困と差別をなくそうと学生運動に参加したむのは，新聞記者になって以後も，無実を訴える被疑者の側に立った取材活動，学童疎開の実態取材など，弱い立場にある民衆との共感関係に根ざした報道を行っている。ここには，貧しい小作農民で，しかも農業だけでは食べられず，生涯の大半を日照りにも吹雪の日にも荷車を引き続けた父への情緒的レベルでの深い結びつき(同一化対象との準拠関係性)が幼年，少年期に形成され，その後のむのの生き方に影響を及ぼしたのではないかと思われる。貧しい生い立ちであっても，親の経済的貧困を否定的に把え，そこから離脱して，経済的豊かさを執拗に求めようとする生き方(同一化対象との否定的準拠関係性)も少くない。しかし，むのの生き方からは，貧しく抑圧されている人々の群れから離脱し，物質的に豊かで恵まれている側に上昇しようという意思が全くと言っていいほどみられないのである。[21]そこには，「金属のように固くて不器用な」生き方であっても，荷車を引いて懸命に妻子を養い，地域の人々のために働き続け，貧しくとも，自分を旧制中学，東京外語に学ばせてくれた父の生き方への深い共感(同一化対象との肯定的準拠関係性)が影響を及ぼしているのではないかと思われる。

むのは小学生のときから，勉強好きの少年だったが，経済的貧困のために畳屋に小僧に行くはずであった。もしも，その通りになっていたら，彼の生き方は大きく変わっていたはずである。立身出世のためではなく，純粋に知的欲求を抱いていた少年の願いをかなえさせてくれるために，むのの人生の転轍手とでも呼ぶべき役割を果たしたのは，寺の住職であり，中学の担任教師だった。むのが中学，東京外語に進学す

るに際しては，むのの親の理解と支持が存在している。その意味では，「学びたいことを学ぶ」という勉学の規範，価値は，住職，担任教師を準拠他者として，親をその支持者として，むのの進学，即ち知的欲求の充足と生き方の可能性の増大に直接的な影響をもたらしたと解釈できる。むのは勉学へのすすめを一方的に受け入れた訳ではなく，小学生のときすでに「もっと学びたい」という知的欲求が内面に芽生えていた。そうした彼の志向性と，住職，教師との相互作用が，彼の生き方を変える契機となったと思われる（準拠他者とむのとの相互作用的過程による規範的準拠関係性の形成）。

むのは，中学の教師，東京外語のムニョス氏らとの出会いを通じ，海外との関係で日本をみる視野の広がりを得ていった。経済的貧困にさいなまれる生活が決して自明な宿命的現実ではなく，変革の可能性もあることを読書を通じて学んでいる。そこには，構造的比較を行おうとする視点の芽生えがみられる。同時に，これらの教師の教えと読書は，むのの生き方に対し，国家の支配的規範の側につくのではなく，被抑圧情況下の自他の解放という規範，価値を内在化し，被抑圧者と共に歩むジャーナリストとしての役割取得を始める契機となった点で，認識のうえで重要な影響を及ぼしている。

しかし，日本ファシズムの確立期におけるジャーナリストとしての彼の生活史をみるとき，怪訝にさえ感じるのは，「女性総進軍」の連載記事など，ファシズムの規範の影響を直接的に受けた形で仕事をしていることである。貧しい人々，被抑圧者の解放を求めて学生運動に参加し，記者になってからは被疑者の側に立って懸命の取材をしたむのが，ファシズムの流れの中に組み込まれていったのはなぜなのか。

その問題を解く鍵は，すでに彼の東京外語在学中に見い出される。むのは，学生時代に水平社の人々と接触したが，敗戦後，彼らを十分に理解していなかったと反省している。[22]「社会を改革したい」思いに根ざす運動体験は，被抑圧者の解放のために活動するという役割取得の具体的な第1歩ではあったが，学生にみられがちな観念的な面が多く，不徹底なままに終わった。[23] 1936年，報知入社後は，記者としての生きがいに燃えて市井の取材に熱中し，客観的，主観的現実がほぼ調和関係にあったとみられる時期が続いた。だが，歴史的にみると，日本は1931年に中国への侵略戦争を開始していた。むのが記者生活を歩み始めた当時には，彼の地で大量の殺戮が相次いでいたのである。弱い立場にある民衆の側に立った取材に努めてはいたものの，むのが，日本ファシズムの行方について，歴史的に十分な洞察をしていたとは思われない。市井のニュースを追い求めるのが面白く，かつそれに忙殺される中で，日本の侵略戦争の本質にまでは目がゆかなかったのではないか。

むろん，中学時代に日本外交の無為無策ぶりを知り，ムニョス氏からはファシズム批判の身をもった抵抗を教えられたむのが，日本のファシズム化について疑念を抱かなかった訳ではない。しかし，ムニョス氏らの影響は，ファシズムに無責任な形で追従していった新聞社の支配的規範の中で，むのの内面の底流に後退していったのではないかと思われる。学生にありがちな観念的な社会変革への願望は，資本主義的企業体の新聞社という所属集団の規範の中で後退をよぎなくされたと解釈できよう。[24]

東条英樹らファシズムを担った政府中枢などの人々と取材を通じて，むのが面識圏にあり，ファシズムの政治，社会情況を報道する立場にあった者として，彼がたとえ局域的にしろファシズムに加担する役割を果たしたことは否定で

きない。日本ファシズムの確立以後，むののムニョス氏，魯迅らとの規範的準拠関係性，被抑圧者の解放という役割取得は内面の奥へと内向し，ファシズムに追従した新聞社との規範的準拠関係性，それに媒介されたファシズムの惰性の中での役割遂行が前面に押し出された。

1942年夏，日本が植民地化したインドネシアで従軍特派員生活をする中で，むのは，大局的な情況認識のうえでは，侵略戦争の本質をほぼ正確に見破っている。妻への手紙に「日本の敵は日本」と書いたことは，侵略した現地で身をもって暮し，侵略者と現地民衆の関係を自分の目で見る中で，ファシズムへの認識を観念だけでなく実感として深めていった軌跡を物語っていよう。この年，日本を外からみて，日本の敵は日本のファシズムと看破したむのは，翌年帰国して，今度は国民の陥っている惨情を内から改めて見直し，日本の侵略戦争は完全な誤りであったという思いを深めた。この時点で，むのは，インドネシア体験と国内の惨情を認識したことを契機とする構造的比較により，国家の至上課題として拡大し続ける戦争（客観的現実）と，「戦争は誤まりである」との情況定義（主観的現実）との不調和を明確に意識している。

しかし，むのは1943年に帰国してからも，「女性総進軍」などの記事を書き，ファシズムに追従する新聞社を退社しなかった。日本の敵は日本のファシズムと認識しながら，ファシズムの惰性の中で記事を書き，敗戦の日まで新聞社にとどまったのはなぜなのか。戦争という極限情況の中での人間の生き方に解釈を加えることは極めて難解だが，あえて推測するならば，むのは認識レベルでは，ファシズムの誤りを看破したが，それに対して具体的にいかに行為すべきかが十分にみえてこなかったのではないか。また，戦時下，新聞記者をやめて，別の生き方をするための社会的条件も見い出し難かったのだと思われる。絶望的なファシズムの破局の中で，新聞社から立ち去ろうとするのではなく，そこに踏みとどまってファシズムの帰結を見究めようとすることは両義的な意味をもっていた。ファシズムに加担する役割を果たしたことの責任回避をしなかったとも言えるが，新聞社から生活の糧を得て，ファシズム追随の報道機構の中で記者としての役割遂行をしている限りは，ファシズムと絶縁することはできなかったのである。

認識のうえでは情況の本質が次第にみえてきても，具体的な行為ではどうにもならない。その葛藤に苦しむからこそ，自己の内面に沈潜可能な読書に救いを求めたのだとみられる。魯迅などの書物は，むのの視野を広げ構造的比較を促進する作用を果たしたが，戦争の破局が近づくにつれて，むのの内的慰めの役割も増大した。

1943年以後，投書担当，学童疎開取材，そして娘の死という実体験を経て，むのは人間の生命と生活こそもっとも尊ばれねばならないことを実感し，その価値を踏みにじるファシズム規範に対する全面的否認に到達した。それ以前の読書や植民地取材による構造的比較に加えて，ひもじさに耐えている学童の姿，娘の死はより一層，むのの<生>の剥奪感を強め，そのことがさらに，構造的比較を鮮明にしたのだと解釈できよう。なぜなら，むのはそれ以前から戦争の誤りを認識していたが，娘の死に直面した際，「戦争中でなければ生命を助けられたのに」と思い，自分の娘が戦争の犠牲者になったことで，戦争の非人間的，抑圧的構造を，これまで以上に明確に対象化しているからである。

むのの場合，学生時代から，ファシズムに抵抗する教師，中国問題や社会主義などの書物と

の出会いにより，自分の属してきた日本社会の自明性を問おうとする構造的比較のための視点を芽生えさせ，魯迅などの読書，植民地取材を通して，認識のうえでは1942年の時点で，ファシズムの本質を大局的には把えていた。だが，これまで属してきた因習的世界から離脱し，根本的に新しい生き方－彼の場合には徹底した反戦主義者への翻身－に向けて歩み出すためには，単に認識の深まりだけでは不十分で，娘の死などを契機に，むの自らの<生>における剥奪感が深まらねば行為には移れなかった。むのの日本ファシズム期における生活史からは，構造的比較が，認識レベルで表層的なものから次第に深まってゆき，さらに自らの<生>の剥奪感の深まりが契機となり，行為をもが根本から揺り動かされ，翻身していった道すじをよみとることができると思われる。

V　結び

以上，主観的，客観的現実論と準拠集団論を手掛かりとして，日本ファシズム期におけるむのたけじの生活史の社会学的解釈を試みてきた。むのの生き方は，180度の方向転換といったドラスティックな翻身事例には該当しない。むのは，学生時代から被抑圧者の解放を願いながら，戦争という極限情況の中で足踏みをくり返した。結果的に，ファシズムに加担する役割を果たす迷妄状態に陥りながら，そこからの離脱を志向して，究極的には反戦主義の立場のジャーナリストの役割を取得し，翻身していった。その意味で，むのの生活史は漸進的に，自己がもっとも望む生き方に接近していった事例である。

ここで，むのの生活史の分析から，社会変動と翻身をとげてゆく主体との関係について次にまとめを加えよう。ファシズムの形成，確立，解体という社会変動が激化する中で，むのの役割遂行は，弱い立場の民衆の側に立とうとする記者活動，次いでファシズム追随の新聞報道に大枠ではくみこまれていった記者活動，そして徹底した反戦主義的記者活動へと変容をとげていった。社会変動の影響を受けながらも，それ以上に，最終的には，むのの自己固有の生き方への視点更新が，彼の役割遂行を変容させていったと解釈できよう。なぜなら，ファシズムの解体期に，むののように反戦主義者として翻身していった人は多くはなかったからである。概括的には，社会変動と，むのの情況定義への視点更新との相互作用過程の中で，彼の場合には彼固有の－大勢同調タイプではない－情況定義に到達し，翻身をとげていった道すじがよみとれると思われる。

最後に，翻身論をめぐる今後の社会学研究の課題に触れると，因習的比較と構造的比較が個人の生活史において，どのような相互関係性にあるのかの問題解明が課題である。理論的には，両者は不連続的であっても，後者の視点が形成される場は，これまでの因習的な日常生活世界の中にしかない。これまでの日常性に不満や相対的剥奪感があったとしても，そこにはまた相互に生活を共にして，助け合い励まし合った仲間たちへの愛着も存在することが仮定視される。これまで属してきた世界がそうした両義的意味をもつとき，構造的比較－日常の自明性を根本から暴露し，くつがえしてゆく作用をもつ－を深めてゆくことは，生活者の多くに葛藤をもたらすだろう。即ち，自己の属してきた世界からの離脱には，解放感，新しい世界への期待感だけでなく，身近な人々，自分がいつくしんできたものとの離別などの痛みが仮定視され，その狭間で自己が引き裂かれるような内面的危機が生ずるのではないか。そうした危機をいかにして乗りこえて翻身してゆくのかに関する問題解明が残されている。

注

(1) Alternationを，山口〔1977〕は翻身，水野・村山〔1979〕は態度変更と訳出している。生活史の社会学研究では，「生涯を左右する生き方の根本的変容」という意味で，前者の訳出が妥当だと思われる。

(2) 生活史の聞きとりに関しては，森崎〔1961, 1976〕，石田〔1973, 1974〕，牧瀬〔1976〕，古庄〔1979〕，中野〔1977, 1981B〕，川原〔1980〕，小平〔1981〕，渡辺〔1982〕など，生活史研究の方法論的問題では，色川〔1975〕，中野〔1981A〕，前山〔1982〕，水野〔1983〕，桜井〔1982〕，有末〔1983〕などを参照。

(3) A. Schutz，P. L. Bergerらの解釈枠組との関連から，Alternationを考察しているものとして片桐〔1979〕参照。

(4) 1940年の大政翼賛会，産業報国会の成立が日本ファシズムの一応の確立を示している。15年戦争中，直接戦火のため失われた生命は日本人だけで300万人に達し，1000万人が家を焼かれた。日本ファシズムに関しては，藤原編〔1975〕，古屋〔1976〕，本村〔1976〕，伊藤〔1976〕参照。

(5) むのは父について「固くて不器用なところが性格にあった。荷車を馬車にかえ，リヤカーにかえ，数え74歳のいまも同じ仕事を続けている」（むの〔1964：14〕）と述べている。

(6) ムニョス氏が，卒業直前の2，3の学生に記念として渡した小冊子には反独裁の言葉がならんでいたと，むのは尊敬と愛惜の念をこめて同氏を回想している（むの〔1964：17〕）。

(7) 1922（大正11）年，未解放部落の人々の解放のため全国水平社が結成され解放運動が展開された。朝田〔1969〕参照。

(8) むのは，旧制中学のころより，国際的視野から日本を構造的に相対化する視点を身につけつつあった。しかし，戦勝ニュースへの彼の反応をみる限り，ナショナリズムからの影響は少なくなかったことがうかがわれる。

(9) この時期の言論統制，報道実態では，髙木〔1972〕，松浦〔1975〕，春原他〔1978〕参照。

(10) 朝日新聞社史〔1969〕は，太平洋戦争下の南方からの報道について，「戦局の悪化とともに，軍の統制はこの特派員活動の抑圧に向けられ，第一線での厳重な検閲，さらに特派員の戦線からの締め出しが進められた」と記している。

(11) むのは，魯迅の改造社版全集を1939年秋ごろに入手，「日本のだれの文学作品からも伝わってこない気魄のようなものに心をひかれて，時々ひもといていた」，「前面にあるものが暗黒であるならば，その暗黒の果てまで，特別気張ったりせず平常の足どりでつき進んでいくこの人のうしろ姿が目にみえる気持になってきた」（むの〔1964：81〕）と戦時下の魯迅からの影響について述べている。

(12) 敗戦までの記者生活を総括して，むのは「物を識別する力が未熟だったから状況の変転にひきずられ，<ことば>のむなしさ，こわさに打ちのめされた」（むの〔1973：115〕），「私は被害の民衆の一人だったと同時に，民衆に加害した新聞社の一員だった」（むの〔1973：123〕）と述べている。

(13) 意味解釈に関する類型化，レリヴァンス体系に関しては，A. Schutz〔1962〕および江原〔1981〕参照。

(14) Bergerらの主観的，客観的現実論に関してはBerger & Luckmann〔1966→1977〕参照。

(15) Bergerらは，第1次社会化を，個人が幼年期に経験する最初の世界の構成，第2次社会化を，個人が属する客観的世界の諸部門，即ち下位世界が内在化されてゆく過程（〔1966→1977〕）と定義している。

(16) Bergerらは，翻身の事例として，癩病患者が

「社会的に劣った存在」という共同社会の解釈枠組を無効化し，「自分たちは神の子だ」という解釈枠組を形成する過程をあげている。Berger & Luckmann〔1966→1977〕参照。

(17) シンボリック相互作用論については，Blumer〔1969〕，McCall & Simmons〔1966〕，船津〔1976〕などを参照。

(18) R. L. Schmittは，準拠他者論の発想として，主体の経験の意味，解釈過程の複雑さに着目している。Schmitt〔1972：182〕参照。

(19) 本稿での準拠関係性についての定式化は，Schmitt〔1972〕，Urry〔1973〕らの研究を手掛かりに進めた。Schmittは，個人ー他者関係性は，準拠他者，準拠関係性，個人の3基本要素で特徴づけられるとして，包括的類型論を呈示した。本稿で，準拠関係性を，同一化，規範的，比較の3位相に分節化した大枠はSchmittの考察によっているが，その定義に関しては，彼の場合，準拠他者と個人との相互作用への把握が不十分なため，再定式化を試みた。また比較準拠関係性を因習的，構造的の2位相に分節化した点に関しては，Urry〔1973〕参照。

(20) S. Freudは，同一化を「他人に対する感情結合のもっとも初期の現れで，感情結合の根源的な形式」と定義している。（Freud〔1921→1970：224〕）参照。Freudの同一化概念については，牧〔1964〕参照。

(21) むのは，敗戦後，秋田県横手市の郷里で地域新聞『たいまつ』（1948年創刊）を発行し続けた。同紙が命脈を保持し得た理由として，彼は1963年3月の日記に，思想，人々の協力，そして貧苦をあげている。「<貧苦>こそは，火が絶えようとしたときに注ぎこまれた最後の数滴のあぶらだ」（むの〔1970：222〕）。

(22) 学生運動の中で水平社の人々と接した点について，むのは「安っぽい同情にとどまった。未解放部落のことを本気で考えるようになったのは，あの「8月15日」以後だ」と述べている（むの〔1968：180〕）。

(23) むのは農民についても，敗戦後，帰郷するときまで「おれも農民のはしくれだ，おれは農民を知っている」と自信を抱いていた。「しかし，小新聞の経営者として農民と接触すればするほど，自分はいかに農民を知っていなかったかを思い知らされた」（むの〔1970：66〕）と，農民理解が多分に観念的であったことを反省している。

(24) むのは従軍特派員のとき，軍の検閲を突破して打電するなど，読者に真実を伝えたいというジャーナリストの良心，社会的役割を何とか果たそうと，ファシズム体制の中で苦闘もしている。その意味では，ファシズムを積極的に支持，宣伝して，御先棒をかついだタイプのジャーナリストとは異なり，学生時代からの被抑圧者への思いは，むのの生き方の底流には存在していた。

記

本稿は，第54回日本社会学会（1981年）の研究報告「翻身に関する現象学的社会学的考察ージャーナリストの生活史をめぐってー」，第56回同学会（1983年）での報告「翻身論ーR. L. Schmittの準拠他者（the reference other）論の検討を媒介にー」の2報告をもととして，さらに発展させたものである。

文献

有末　賢　1983　「生活史研究の視角」，『慶応義塾創立125年記念論文集・法学部政治学関係』。

朝田　善之助　1969　『差別と闘いつづけてー部落解放運動50年』，朝日新聞社。

朝日新聞社社史編修室編　1969『朝日新聞の90年』，朝日新聞社。

Berger, P. L.　1963　Invitation to Sociology. = 1979　水野節夫・村山研一訳，『社会学への招待』，思索社。

Berger, P. L. & Luckmann, T. 1966　The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge. = 1977　山口節郎訳，『日常世界の構成』，新曜社。

Blumer, H.　1969　Symbolic Interactionism: Perspective and Method, Prentice Hall.

江原　由美子　1981「シュッツにおけるレリヴァンスの問題をめぐって」，『社会学評論』127号(32-3)。

船津　　衛　1976『シンボリック相互作用論』，恒星社厚生閣。

Freud, S.　1921　Massenpsychologie und Ich-Analyse. = 1970　小此木啓吾訳，「集団心理学と自我の分析」，『フロイト著作集6』，人文書院。

古屋　哲夫　1976「日本ファシズム論」『日本歴史20・近代7』，岩波書店。

藤原　　彰編 1975『日本民衆の歴史9・戦争と民衆』，三省堂。

春原　昭彦・服部　孝章・村田　敏彦・渡辺　牧　1978「戦時報道の実態－太平洋戦争期間中の「朝日新聞（東京）」ならびに「東京日日新聞（毎日新聞＝東京）」にみる記事内容の変遷－」，『コミュニケーション研究』第10号，上智大学コミュニケーション学会。

Hyman, H. H. & Singer, E. (eds.)　1968　Readings in Reference Group Theory and Research, Free Press.

色川　大吉　1975『ある昭和史－自分史の試み』，中央公論社。

伊藤　　隆　1976『日本の歴史30・15年戦争』，小学館。

石田　　忠編 1973『反原爆－長崎被爆者の生活史－』，未来社，同編 1974『続反原爆－長崎被爆者の生活史－』，未来社。

片桐　雅隆　1979「類型的行為と『問題』的状況－日常的世界の秩序とその再編について」，『人文研究』(31-5)。

香坂　順一・太田　辰夫　1965『現代中日辞典（増訂版）』，光生館。

川原　一之　1980『口伝・亜砒焼き谷』，岩波書店。

小平　朱美　1981『老人福祉とライフ・ヒストリー』，未来社。

古庄　ゆき子　1979『豊後おんな土工－大分近代女性史序説』，ドメス出版。

前山　　隆　1982『移民の日本回帰運動』，日本放送出版協会。

牧瀬　菊枝　1976『聞書－ひたむきの女たち－無産運動のかげに』，朝日新聞社。

松浦　総三　1975『戦時下の言論統制・体験と資料』，白川書院。

McCall, G. J. & Simmons, J. L.　1966　Identities and Interactions: An Examination of Human Associations in Everyday Life, Free Press.

牧　　康夫　1964「フロイトの同一化概念について」，『人文学報XX』，京大人文科学研究所。

Mead, G. H.　1934　Mind, Self and Society. = 1973　稲葉三千男他訳，『精神・自我

・社会』，青木書店。

Merton, R. K. 1957 Social Theory and Social Structure. =1969 森東吾他訳，『社会理論と機能分析』，青木書店。

水野　節夫　1983 「エリザベート・フォン・Rの症例の分析」，（未発表）。

森崎　和江　1961 『まっくら－女坑夫からの聞き書き』，現代思潮社。

森崎　和江　1976 『からゆきさん』，朝日新聞社。

本村　敏雄　1976 『傷痕と回帰－流亡する日本人－』，講談社。

むの　たけじ　1964 『たいまつ16年・定本』，理論社。

むの　たけじ　1967 『詞集たいまつ－人間に関する断章604－』，三省堂。

むの　たけじ・岡村　昭彦　1968 『1968年－歩み出すための素材－』，三省堂。

むの　たけじ　1970 『定本・雪と足と』，三省堂。

むの　たけじ　1973 『解放への十字路』，評論社。

中野　卓 編著　1977 『口述の生活史－或る女の愛と呪いの日本近代－』，御茶の水書房。

中野　卓　1981A 「個人の社会学的調査研究について」，『社会学評論』125号（32-1）。

中野　卓 編著　1981B 『離島トカラに生きた男・第1部－流浪・開墾・神々』，御茶の水書房。

Parsons, T. & Shils, E. A. (eds.) 1952 Toward a General Theory of Action, Harvard University Press.

桜井　厚　1982 「社会学における生活史研究」，『南山短期大学紀要』第10号。

作田　啓一　1980 『ジャン・ジャック・ルソー－市民と個人』，人文書院。

作田　啓一　1981 『個人主義の運命－近代小説と社会学』，岩波書店。

Schmitt, R. L. 1972 The Reference Other Orientation: An Extension of the Reference Group Concept, Southern Illinois University Press.

Schutz, A. 1962 Collected Papers I, (edited by Natanson), M. Martinus Nijhoff.

Shibutani, T. 1955 "Reference Groups as Perspective", American Journal of Sociology, 60.

高木　教典　1972 「天皇制支配体制下の言論の自由」，『講座現代日本のマス・コミュニケーション2』，青木書店。

Turner, R. H. 1956 "Role-Taking, Role Standpoint, and Reference Group Behavior", American Journal of Sociology, 61.

Urry, J 1973 Reference Groups and the Theory of Revolution, Routledge and Kegan Paul.

渡辺　牧　1982 「志向性の社会学序説－ある編集者の生き方をめぐって－」，『ソシオロゴス』第6号。

渡辺　牧　1983 「家族成員の関係変容－シンボリック相互作用論の検討を媒介として－」，『ソシオロゴス』第7号。

（わたなべ　おさむ）